

# 『エルルウの下に』

著作 a s h

※この作品はリーフ／アクアプラスの『うたわれるもの』を元にした創作です。

堅い意志のもとに行動しようとするとき。

己の利ではなく、また己の命を顧みず、他者のために立つとき。

それまで如何なる行いを重ねていようが、男は漢となる。

そして、漢の漢たるを知るのもまた、漢である。

『エルルウ、オレは何としてでも、この戦をやめさせてみせる』

悲壮なる決意を胸に秘め、ヌワンギは何処とも知れぬ道ならぬ道を歩いていた。

すでにケナシコウルペの主力はヌワンギの指揮下で壊滅状態であったので、叛乱は大勢が決したと言っても過言ではない。しかし、それでも皇都にはまだ兵力は残っていたし、何よりも名将ベナウイがいるのだ。

それ以上に、インカラが叛乱をこのままにしておくはずがないのは、ヌワンギにはよく分かっていた。だから、自分が皇都に戻ってインカラに戦をやめるように言ったところ聞かなくてもなければ、自分もただではすまないであろうことも、分かっていた。

だが、それを分かっているも、ヌワンギは逃げようとはしなかった。

(ここで逃げたら、オレは本当にどうしようもねえ奴で終わっちまって、バアちゃんにだって顔向け出来ねえじゃねえかよつ。それに……それによお……)

ふと星を見上げながら、ヌワンギは幼馴染みの泣き顔を思い浮かべた。

(これ以上、お前に泣き顔をさせたく——)

だが。

そのとき、ヌワンギの軀から鈍い音がした。

「……へ？」

思わず我が身を見ると、腹から真つ赤になったものが飛び出していた。

「なん……で……？」

あまりに一瞬のことだったので、痛みがあったのかなかったのかすら分からず、ヌワンギは自分の軀を貫いたそれ——槍の切っ先をただ見つめるばかりだったが、程なくして人の声が届いた。

「見ろよ、こいつはかなりの上玉だぜ」

「悪く思うな。俺たちはただ、お前たちにとられたモノを返してもらってるだけなんだからな」

これまでインカラヤササントに虐げられてきた民らしい物言いではあるが、それは単なる落ち武者狩りであった。あるいは、本当に重税に苦しんだ民であったのかも知れないが、だからと言って追い剥ぎを正当化する理由にはならないものだ。

「おい、確かこいつ、侍大将オムツィケルじゃねえのか？」

追い剥ぎどもはヌワンギの顔と装備を見て、にわかに色めき立った。しかし、当のヌワ

ンギ自身はそんなことを考えるのでもなく、ただされるがままだった。最初の一撃でほとんど動けなくなっていたのだ。

(エルルウ、バアちゃん……)

追い剥ぎどもの会話など、すでにヌワンギの耳に入っておらず、また入っていたところで何も出来なかったろう。

追い剥ぎどものぎらついた視線など意に介さず、ヌワンギはまたもや星を見つめているだけ。いや、そこにあるのは自分が求めてやまなかった、幼馴染みの笑顔と、母親代わりの老婆の厳しくも優しい笑顔だった。

「エルルウ……」

そして。

ヌワンギの視界は赤く染まって、そのまま闇に溶けていった。

『エルルウの下に』

遙か、遠く。

誰かが立っている。

それはとても懐かしい存在。

温かく、厳しく、そして、何よりも深い。

(バアちゃん?)

『ヌワンギかえ。やれやれ、お前は本当にどうしようもない奴じゃな』

(バアちゃん、生きてたのかよっ!)

『どうしてお前はそんなにオメデタイんだろね? あの娘の息子にしちや、出来が悪すぎ

るってもんだよ』

(バ、バアちゃん、何言ってるんだよ?)

『ヌワンギ、お前は漢おとこじゃないのかえ?』

(オレは…オレはっ!)

『だったら、分かるだろ? 己が何をすべきかは』

(ああ、分かってるさ。でも、オレ、バアちゃんに……)

『何だい、このトウスクール様にお前ごとき若造が何をしようってんだい?』

(でもよう……)

『ここはお前のいるべき場所じゃない。早く帰るがいいよ』

(バアちゃん!)

『漢おとこなんだろ?』

(……ああ)

『エルルウの下に』

『エルルウたちのことはハクオロに任せて、お前はお前のすべきことをやればいい』

(……分かってるぜ、バアちゃん)

『やっと昔のお前の顔に戻ったね。次に会ったときは、チマクをご馳走してやるかの』

(いつまでも子ども扱いすんなよ)

『なあに、お前はいつまでも私の子どもさね。あの娘にお前を託されたときから、ずっと

ね』

(……バアちゃん)

ゆっくりと光が戻る。

眩しすぎることもなく優しく揺らめいてる光が、又ワングの臉を叩いて、ゆっくりと意識も覚醒させていく。

(ここは……)

揺らめいてる光の正体は、松明たきまの明かりであることを理解した又ワングは、自分がいるのが、地ディネホクシリ 獄コトウアハムルでも常トク世でもないことを知った。

(なんで、オレは生きてるんだ……)

当然のように浮かんだ疑問に対して、無意識のうちに又ワングは周囲の様子を確かめようと試みていた。

だが。

「うっ——」

軀を動かそうとしたとき、背中から腹部にかけての激しい痛みうめきに襲われ、堪らずに低くうめき声を上げてしまった。

すると、又ワングの視界の隅で何かが動いた。

(な、何だっつんだ)

今の自分の状況そのものを理解したとしても、何故そうなっているのかと言う点まで理解が及ばない以上、又ワングは少なからず警戒していた。もっとも、警戒したところで軀が思うように動かない状態では、何も出来ないのだが。

(チクシヨオ……)

思う通りに動かない自分の軀に苛立ちを覚え、なおも近づく心配にあからさまな敵意を

ぶつけてみせる。

「が、不意に静かな低い声が響いた。

「無理に動くでない」

年齢を重ねた者だけが持つ、独特の重みと威厳、そして言いようのない深みを合わせたような声色だった。

「あ……」

ひとことでしかなかった。それなのに、ヌワンギはその声色に懐かしい何かを感じ取り、思わず言葉を失っていた。それまで感じていた苛立ちも、相手に向けていた敵意も消し去って。

「まだ動ける状態ではないのだから、無理をしてはいかんの」

言葉を続けながら近寄ってきたのは、老人だった。頭髪はすでに真っ白になり、顔にも大きな皺が寄っていて、頑強そうな印象など少しもない、ただの老人のように見えた。

しかし、何よりもヌワンギの興味を引いたのは、その特徴的な耳。

「アンタ……エヴェンク——ツウ」

言葉を痛みで遮られ、ヌワンギがそのまま床に伏す格好になると、エヴェンクルガの老人はゆっくりとヌワンギに近づきながら、口を開いた。

「生い立ちなど、今の儂とお前さんには関係なからう？ 儂はこの森に住むただの老いた

猟師に過ぎんよ」

老人は淡々とした語り口でそれだけ言うと、ヌワンギの横に腰を下ろす。

「ふーっ……それじゃ、アンタがオレを助けてくれた、ってのか？」

「助けた、と言うことになるのかも知れんな」

「……何でだよ」

「お前さんの目だ」

「オレの目？」

「古い知己を思い出した……それだけじゃよ」

ふと遠くを見るような目をして、老人が短く告げるのを見て、ヌワンギはそれ以上訊くのをやめた。たぶん、それ上訊いたところで老人も答えないだろうと、分かってしまったから。

「ジイさん、名前は何てんだ？」

本気で訊いてるつもりはなかった。

遠い目をして黙ってしまった老人に、そうさせるようなことを訊いてしまった自分にわずかな後悔を感じていた故の、単なる話題の切り替えに過ぎなかった。だから、老人が答えようが答えまいが、どちらでもよかったのだ。

そんなヌワンギの意図をくみ取ってか、老人は軽く笑いながら返す。

「人に名を尋ねるときは、自分から名乗るものではないかな？」

「う……」

にわかにはヌワンギは困惑の色を浮かべ、返答に窮した。と言うのも、どんな経緯であれ自分がケナシコウルベの侍大将のヌワンギであるのは事実であり、老人が何を思って自分を助けたのか、その真意がはつきりと分らない以上、むやみに自分の素性を明かしているものか悩んでしまったのだ。



「どうした？」

「あ、いや、オレは……又……」

催促されて思わず言いかけたものの、それでもヌワンギは悩んで挙げ句、

「ヌ……ギ……だ」

途中を口の中で消して、名乗った。

老人は明らかに不審なヌワンギの様子を気にしなかった風で、ゆっくりと笑いながら、

「ヌギとは、変わった名前だの」

それだけ告げた。

（ばれてねえのか？ まあ、いいや。今は少なくとも、オレがケナシコウルベの侍大将だっことは隠しておいた方がいいからな。とにかく軀が動くようにさえなれば……）

軀さえ動けば、自分のなすべきことをやり遂げるために、皇都に赴くだけのこと。それさえ叶えば、他のことなどどうでもいいのだ。素性も隠せるものなら隠しておいた方がいいに決まっている。

自分の中で秘かに決意をまとめるに至って、ヌワンギはようやく落ち着きを取り戻すことが出来た。

（そうだが、オレにとっちゃ他のことなんて、どうでもいいことなんだからよお……）

とは言うものの、さしあたっての興味は目の前にいる老人に注がれていくことになり、ヌワンギは先ほどと同じ質問を繰り返す。

「ところで、ジイさんの名は？」

「儂か？ 儂はただのジジイじゃよ」

どこかはぐらかすような物言いではあったが、ヌワンギもそれで引き下がりはしなかった。先ほどとは違い、気持ちに余裕が生まれていたのであるが、単純に「知りたい」と言う気持ちも強かったのだ。

「オレは名乗ったじゃねえか」

「そうか。確かに儂だけが名乗らんのは、礼儀に反すると言うものであるな。はっはっはっはっ」

どこまで本気で言ってるのかヌワンギには分からなかったが、そう言って豪快に笑った後、老人は姿勢を正してヌワンギを真正面に見据えるようにしてから、口を開いた。

「我が名はトウケイと申す。見ての通りエヴェンクルガの者じゃが、故あってこの森に隠棲する身。貴殿が命を助けたるは、ひとえに我が信義に従ったまでのこと。これも何かの縁と思ひ、どうか貴殿も氣遣いなくその軀を癒されるがよい」

「なっ……」

突然の挨拶にヌワンギは狼狽した。その物腰は間違ひなく、武人もののふのそれであり、よどみなく言い切った言葉に一片の偽りの匂いなど感じさせない、そんな俠気わたくしげに満ちていた。

（な、何だよ、このジイさんは……）

強い物腰で言ったわけでもないのに、老人の静かな言葉に圧倒おどろされている自分に気づくと同時に、ヌワンギには目の前の老人——トウケイが尊おどろうべき漢おどろであることを悟った。

「ジイさん」

「何じゃな？」

名乗ったにも関わらず名前ではなく、「ジイさん」と呼びかけるヌワンギに対して、トウケイは別段気にする様子ではなかった。それはヌワンギですらまだはつきりと自覚していないものをすでに感じとっていたからだ。

漢おとこを知るはただ漢おとこのみ。

そう、ヌワンギを追い剥ぎどもから救ったのは、トウケイがヌワンギの瞳まなこに漢おとこを見たからであり、悲壮な決意を秘めた者だけが漂わせる匂いを感じていたからだ。

だから、このときヌワンギが何を言うつもりであったのかも、トウケイには分かっていた。十分過ぎるほどに。

「オレを…、オレを漢おとこにしてくれっ、頼むー」

ヌワンギはまだうまく支配出来ない自分の軀をどうにか動かし、いや、動かそうともがきながら、その度感じる激痛に堪えながら、トウケイに頭を下げた。

しばらくの間、トウケイは何も言わずにただじっと、頭を下げるヌワンギを見つめていた。

「頼むっ……」

やがて。

トウケイはゆっくりと、そして静かに問うた。

「何故、死に急ぐ？」

それはヌワンギにとっては思いもよらない問いだった。

「軀を癒して平和な地に暮らせば、貴殿はここで助かった命を穏やかに全う出来るのではないか？」

「ぐッ…」

静かな問いかけに対し、ヌワンギは頭を下げたまま絶句した。

つまりトウケイの言わんとするところは、「おとなしく他の地に逃れよ」であり、それは先ほどの自分の願いに対する拒絶であるのだ。

(な、何でだよ……。オレは、オレはここで…)

何もしいまま、ただ逃げるだけで終わるのか。

漢にもなれず。戦も止められず。ただ、ここで軀を癒して、余所の地で暮らすのか。

所詮、自分は漢などになれる器ではない、そう言うのか。

そう思うと、ヌワンギはくやくして仕方がなかった。

だが、目の前にいる漢の容赦ない物言いがくやしいのではない。そう言わせてしまう、自分の不甲斐なさがあまりにくやくしかった。

(冗談じゃねえっ、オレは、オレは……)

と、そこでふとそれまで自分がしてきたことが浮かんできた。

まだ幼く何も知らない自分と、同じように何も知らない幼馴染みと過ごした穏やかな日々。決して裕福ではないが、家族としての幸せが確かにあった、そんな日々。

だが、ササンテに連れ戻されてから知った富と権力と言う甘い蜜の味に、幼い日の記憶もいつしか消え去り、傲ることに恥を覚え、他者を貶めることを喜びとし、いつしか幼馴染みの笑顔すらも奪っていた、あまりにも愚かな自分。

そして、ついには自分の家族をも失うことになってしまった、愚かと言うのさえ足りないほどの自分に、手を差し伸べてくれた人がいた。

その大切な人から笑顔を奪ってしまったのは、他ならぬ自分なのに。

それでも、自分を許してくれた人がいた。

(エルルウ……オレは……駄目なのか？ 本当に何も出来ないのか？ お前の涙を止められないのか？)

頭を下げた姿勢のまま、ヌワンギは自問自答して、いつしか涙が溢れて止まらなくなっていた。

「何故、泣くか？」

「わ、分から、ねえ……。けど、オレはこのままで、終わりたくねえんだよっ」

トウケイの問いに答えながら、ヌワンギは頭を上げて、トウケイを見つめた。その顔はすでに涙でぐしゃぐしゃになっていたが、トウケイもまっすぐにヌワンギを見つめ返すだけ。

しばらくして、トウケイはゆっくりとヌワンギの肩に手を置いた。そして、優しくいわるのようにそっと肩を撫でながら、先ほどまでの厳しい口調ではなく、ただの老人と言わんばかりの柔和な口調で告げる。

「漢たる者、人前にてむやみに涙を流すものではない——が、この場に居るのは、儂とお前さんだけ。今だけは流すがいい。儂も松明の揺らめきに消える夢としよう」

「ジイさん……」

「お前さんの漢たるは、儂には分かっておった。だが、お前さんは軀が動くようになれば、死に行くつもりであったらう？ さすれば、儂はそれを看過出来なかったのじゃよ。己だけが満足するような愚かな死など、漢の死に様ではないからの」

「なっ……」

ヌワンギはそこで自分の考えの浅はかさを思い知った。つまり、トウケイの言わんとするところをようやく理解したのだ。

今自分が何も考えずに行動したところで、それは無駄死にであり、つまるところ誰にとつても意義のあるものではなく、ヌワンギの自己満足に過ぎないのだ。そして、そのような自己満足な死など、漢おとこが選ぶものではないのだ。

トウケイが求めるのは、ある意味において苛烈であつたらう。自己満足による潔い死よりも、どのような苦難や苦渋の日々があろうとも、必ず漢おとこにはその命を果たすべき日やってくるのだから、それまで生きて耐えよ、と言うのである。

「ジイさん：アンタ、オレのこと…知ってるのか？」

間違ひなく愚問ではあつたが、ヌワンギはそう訊かずにはいられなかつた。助けられたことにしても、こうして話していることにしても、自分の正体を知っているからこそではないかと思えてならない。

だが、それに対してトウケイはゆつくりと首を横に振つた。

「先ほども言つたはずじゃ。お前さんを見て、古い知己を思い出した、とな」

「それって、誰なん——ッ！」

ほぼ反射的に訊き返したヌワンギだったが、してはならない問いであつたことを瞬時に悟つた。答えが分かっているのではないのだが、もしかしたら、それは本当にヌワンギ自身も知っている人物かも知れないのだと言うことに思い至つたからだ。

「いや、すまねえ、ジイさん……今のはなかつたことにしてくれ」

『エルルウの下に』

た。  
あわてて取り繕ったヌワンギに対し、トウケイはただ穏やかな笑顔で答えるばかりだっ

それから――

ヌワンギは自分の軀の治癒に専念していた。如何なる目的があろうとも、軀が癒えてない状態では、どのような働きも叶うものではないのだから。だが、それは焦燥と苛立ちを生み出す原因にもなっていた。

トウケイはエヴェンクルガでありながら、最初に言ったように獵師としての生活を営んでおり、常に小屋にいるわけでもなく、ヌワンギも一人でじっとしていることが多かった。  
(痛え……)

薄目だけが入ってくる小屋の中、未だに痛みを訴える軀を横たえ、ヌワンギはそっと傷口に手を置いた。いくつかの葉を混ぜたものが塗られた上に、厚い布で覆われているので、手を置いたくらいでは痛みはない。

(葉か……)

その葉にしても、施した処置にしても、トウケイがこのようなことに手慣れている証左ではあったが、ヌワンギにしてみれば、葉と聞いて連想するのは他の人物のことだ。と言うのも、トウケイは確かに武人ものづゑであり、経緯はどうあれ狩獵を生業とする身であるのだから、怪我の手当に通じていても不思議はない。しかし、葉の調合についてはどうだろうか。葉草を採ってくることもあったが、それらはごく簡単な傷葉や腹葉だと、何よりもトウケイ自身が語っていた。

と、なれば。

自分に施された葉の調合は誰がしていたのか。効能に個人差があるので、本来ならば葉師がそれぞれに合わせた調合をするのだが、それでもある程度の平均化が出来ると聞いた



ことがある。患者の様子を直接看られないときは、そのような薬を人に持たせて行くのだとも。

(バアちゃん、だよな…)

トウケイが話していた古い知己とは、ヤマユラの集落の長であり、薬師としての名も通っていたトウスクールその人に違いない。ただ、それが確信となるにつれ、ヌワンギはもう一つのことならについて悩んでしまうのだった。

(…ジイさんの知り合いがバアちゃんだってのはいいとして、そうすると、あのジイさんはオレのことも…本当は知ってるのかもな)

何もかも知っているからこそ、ヌワンギの素性を追求せずに、ただ死に行くのを潔しともしない、そう言ってるのではないか。

そんなことを考えながらも、結局ヌワンギにとっては、軀が動かないことには何も出来ないことに変わらない。

(クソツ、この軀がよお)

苛立たしさを覚えると同時に、自分の不甲斐なさに嫌気がさしてくるが、それでもトウケイの言葉は重くのしかかっていた。

『己だけが満足するような愚かな死など、おとこ漢の死に様ではない』

(自分だけが満足する死に方、か…)

そつと心の中で反芻していると、不意に小屋に人の姿が現れた。

トウケイだった。

山菜摘みに行くと言って出掛けた通りに、腰に付けた小さな駕籠は山菜らしきもので一

杯になっている。

「今日はなかなか調子がよかったのお」

一人ごちるようにトウケイが明るい口調で言うと、ヌワンギもつられるようにそれまで感じていた苛立ちや焦燥が消えていくような気がした。それは、一人ではない、と言う事実がなせる技であつたらう。

自問自答ではなく、自分が発した問いに対して答えが返ってくる、そんなささやかな事実を噛みしめるように、ヌワンギはトウケイに向かって問いかけた。

「なあ、ジイさん、いいかい？」

「ん」

「何でアンタはこんなところに一人でいるんだ？ エヴェンクルガと言ったら、普通は……」

ヌワンギでさえ聞き及んだことのあるエヴェンクルガ族の話は、まさに義を尊ぶものもの武人の姿であつて、このように森に隠棲する者などがいるとは思えなかつた。

トウケイに何らかの事情があるのは間違いない、またそれに触れていいのかどうかもヌワンギには判断出来なかつたが、それでも単純にトウケイと言う老人に興味があつたのは事実で、だからこそその問いかけだつたのだ。

「何よりも義を尊び、義に生き、義に死にゆく誇り高き武人ものもの、か」

「あ、ああ……」

「残念ながら、僕はその『義に生き、義に死にゆく』のを潔しとせなんだ。誇りなどどうに捨てておるしな」

「ジイさんほどの漢おとこが、そんなことを言うのか？」

目の前にいるエヴェンクルガの漢おとこが、自らの拠たもとつて立つところを捨てたと言われても、ヌワンギは信じられなかった。ここで過おとごし始めてまだ日が浅いとは言え、トウケイの漢おとこたるは十分に分かつていたのだから、無理もない。

頼りなげな目を向けるヌワンギに対し、トウケイはため息を一つ吐いてから、苦笑混じりに訊き返す。

「お前さんに一つ訊くが、義を尊ぶとはそれほど重要なことか？」

「そりゃあ大事じゃねえのか」

当たり前あたりまえの回答をしたヌワンギに対して、トウケイはわずかに表情を堅くして、さらに問いを続けた。

「己や大切な者の命よりも、か？」

「そ、それは……」

自分の命はともかく、大切な者の命よりも義を尊ぶか、と問われてしまつては、ヌワンギには返す言葉がなかった。義を尊ぶと言う以前に、自分は大切な者の命を奪つてしまつたことがあるのだから。

(バアちゃん……)

言葉に詰まるヌワンギの前に、トウケイはそつと目を閉じ、静かに言葉が続けた。自分のこれまでを振り返るように。

「かつての儂は義を尊ぶあまり、愚かにも真に大事なものを見失つておつた。己が義を立てた主君の命に従い、己が兄弟を討ち、正義が主君にないことを知つた後に主君をも討つ

たのじゃ」

トウケイの語った経緯は非常に簡潔なものだった。これが酒宴であれば、古い英雄譚にもありそうな話として、一笑されるほどに。だが、酒宴でもないこの場で、まして冗談でこのようなことを語る漢おとこなどいるものではない。

つまりは、トウケイの簡単な説明は、事実であるが故の簡潔さと重さを持ち合わせていたのである。

「ジイさん」

だが、トウケイに掛けるべき言葉は何もない。トウケイが同情を求めて話したのではないことなど分かりきっていたし、ヌワンギも同情などトウケイに対し礼を欠く真似はしなかった。

しばらくして、トウケイが目を開ける。

そして、年齢相応の穏やかな笑みを浮かべながら、言った。

「儂もお前さんと同じように、死に場所を求めたことがあった」

「あ？」

「すべてを失った後にな。だが、そんな儂の真正面に立ちほだかり、儂を打ち負かした者がいたんじゃよ」

(あのバアちゃんなら、相手がエヴェンクルガの漢おとこでも、な…)

これまでの流れを見ても、漢おとこを前にして怯まず臆さず、堂々と渡り合えるばかりか打ち負かすことが出来るのは、やはりトウスクール以外に考えられなかった。もつとも、打ち負かすと言っても、別にトウスクールが武術に優れていたと言うのではなく、トウケイもま

たそうした面で負けたと言ってるのではないことも、何となく理解していたが。

「それがジイさんの古い知り合いってわけか」

「そうじゃな。今も僕はその者との誓いを守って、こうして生き長らえてると言うわけじゃ」

「誓いってどんなんだよ？」

「それは言えんな」

「そうか。で、その、知り合いって……いや、やっぱりいい」

トウスクールではないのか、と言おうと思ったが、ヌワンギは自分でそれを遮った。言っても答えてくれるとは思えなかったのと、そもそも今さら確認したところで何も言えないのだと気がついたから。

（バアちゃんはオレが殺したようなもんだ……。知り合いって言うジイさんに、今さら何を言えるってんだよ、なあ？）

心の中で自問してみても、ヌワンギの中にはっきりとした答えは出なかった。ただ、余計なことなど言わずとも、トウケイもトウスクールも笑ってくれそうな、そんな気だけがしていた。

（ヘッ…ヘッ……）

そう思うと何故か知らないが、可笑しさが込み上げてきて、そと心の中で笑っていた。もっとも、そのときのヌワンギの顔は笑い顔ではなく、半泣きのそれであったが、トウケイは何も言わずに、ただ穏やかな笑みを浮かべていた。

その日の夜。

山菜と木の実だけのごく簡単な食事を前に、トウケイが話を切り出した。

「又ギよ、お前さんに話すべきことがあるんじゃないか？」

「何だよ」

「少し前になるが、ケナシコウルベの皇オウトルオが討たれたそうじゃ」

「なっ…そ、そうかい…」

かろうじて、又ワングは言葉を返すことが出来たが、それが精一杯だった。

（っ……あいつら、もう、そこまで……）

戦をやめさせると決意した自分の立場が、いきなり失われたことに動揺は隠せないが、それよりもエルルウたちの行動の早さにも驚愕するばかりだ。もともと、エルルウたちの動きが早いと言うよりも、自分がいたずらに時間を費やしてしまったと言うのが正しく、すぐにそれも理解した又ワングだった。

（って、オレがこんな状態で動けなかっただけ、か……）

そんな又ワングの動揺ぶりを見ていながら、トウケイはなおも言葉を続ける。

「叛軍を指揮していた男がそのまま皇オウトルオの座についたと言うが、お前さんの知ってる者かいの？」

「そ、それは……」

またしても言葉に詰まる又ワングだが、何も気にしない、あるいは何もかも知っているような風に、さらりと流すようにトウケイが告げる。

「儂はお前さんの素性などどうでもいいんじゃないが、この先どうするのか考えてみるとい

な」

どうするか、と問われてヌワンギは暫し動きを止めた。

すでに叛乱は終わった。自分の伯父、インカラと差し違えてでも戦を止めるつもりだったのだが、今となっては何の意味もないのだ。

(オレの決意は……意味がなかったのか?)

エルルウに救われ、トウケイに救われた自分は、果たして本当に生きている意味があるのだろうか。ヌワンギは自分が今ここにいての意味を改めて問うてみた。

ササンテの跡取りとしての地位を保証され、何もかも自分の思い通りになると思い、逆らう者を容赦なくむち打った自分。

ハクオロによって追われたとき、ササンテが自分を捨て駒にしようとしたことに怒り、父親をこの手で殺した自分。

インカラに取り入って、一軍の将としての力に溺れ、無辜の民を討ち滅ぼした自分。

振り返るほどに過去の所業はヌワンギを苦しめるだけで、思い浮かぶのはトウスクルの困ったような顔とエルルウの泣き顔だった。

(こんなオレが…今生きてる意味って何だっただよお、チクシヨオ! バアちゃん、オレ…)

だが。

ふとヌワンギの耳に、懐かしい声が届いたような気がした。

『エルルウたちのことはハクオロに任せて、お前はお前のすべきことをやればいい』

それは遠い風景の中で聞いた言葉。

(バアちゃん!)

さらに、別の言葉が繰り返される。

『ヌワンギ、お前は漢おとこじゃないのかえ？』

(っ！)

そのとき、ヌワンギは顔を上げて、トウケイをまっすぐに見つめた。

義を尊ぶあまりに大事なものを失ったと語ってくれた漢おとこを。

自己満足だけの死など、漢おとこの選ぶ道ではないと語ってくれた漢おとこを。

そして、それこそが、目の前にいる漢おとここそが、自分の答えであることをヌワンギは悟った。

「ジイさん」

トウケイを真正面に見据えたまま、ヌワンギがゆっくりと口を開くと、相手もまた視線をそらすことなく、ゆっくりと返す。

「何じゃ？」

「死に場所を探しに行くのは、駄目なんだろう？」

「さてな」

どこかはぐらかすようなトウケイの言いぶりではあったが、それでもヌワンギの言葉にすでに迷いはない。

「けど、オレはやっぱり行かなくちやなんねえんだ」

「何処に行くと言うんじゃ？」

「皇都にさ」

はつきりと告げたものの、ヌワンギにはそれ以上の明確な答えはなかった。ただ、皇都



に赴いてもエルルウたちに会うつもりは全然なく、自分が何か役に立てることがあれば、その身を投じるだけのつもりだった。

だが、トウケイの言葉はそんなヌワンギの気持ちを吹き飛ばすほどの威力を秘めていた。

「しかし、今のお前さんでは何の役にも立たないのではないかな」

「うっ…」

「軀も癒えず、未だにまともに動けぬ身とあつては、皇都に行くなど無謀の一語と言うものじゃ」

それはこの上もなく正確な事実であつたが、だからと言って素直に聞けるヌワンギではなかつた。

「そんなことは分かつてるさ。でもよ、ジイさん、オレは行かなきゃよ」

「まあ待て、ヌギよ。今は少なくとも軀を癒すべきであろう？」

「けどよお」

「お前さんの気持ちは分かる。じゃが、その気持ちだけですべてがうまく行く道理があるまい」

「う…」

トウケイの言葉がことさら正論めいた言い方になつてるのは、ヌワンギもどれが正しい道かを知っているからである。この時点でヌワンギにあつたのは、あくまでも単なる感情論に過ぎず、それこそ自己満足以外の何者でもなかつたのだから。

自分でもそれは気づいていた。いや、最初から分かつていた。ここでそんなことを言つても詮無きことだと言うのも。だが、ことが感情に根ざしているだけに、理屈で納得でき

るものではなかっただけなのだ。

「それじゃ、オレはどうすればいいんだよ……」

半ば自棄気味にヌワンギがつぶやくと、そこでトウケイは楽しそうな笑みを浮かべた。

「いや、お前さんの命はもつと必要とされるときまで取っておけ、と言うだけじゃよ。それも、出来るだけイキのいい、そうさな、地獄ディエボラでも暴れ回れるくらいに元気な命でな」

「滅茶苦茶な話だな、そりゃ」

「ヌギよ、お前さんが今どのような気持ちでいるかは儂には分かる。だからこそ来るべき日に備えて、今のお前は軀を癒し、もつと強くあらねばならんのではないかな？」

「強くだってえ？」

トウケイの言葉の一部に、ヌワンギが反応する。その意味するところに、期待しながら。

「って、それってよお、つまり」

「僭越ながら、この儂がお前さんに手ほどきしようではないか」

「ジイさん！」

「まずは、その軀を完全に癒すことじゃ」

「おうよ」

エヴェンクルガの武人もののぶが自分に手ほどきをしてくれる。それだけでヌワンギは昂揚を覚えた。ただ待てと言われるより遙かにヌワンギには効き目がある申し出ではあったが、同時にまた違った焦燥を生み出しもした。ただし、それは後ろ向きの感情による産物ではな

かったので、必要以上にヌワンギの苛立ちを誘うことはなかった。

その日以後、ヌワンギはひたすら治療に専念していた。かと言って、ずっと寝ているばかりでもいられずに、少しずつ鍛錬も始めていた。もちろん、トウケイに言われたことは守り、決して無理はせずに。

こうして、瞬く間に日々が過ぎ去っていった。

トウケイは狩りに行く以外に一人で行動することが多かったが、ヌワンギは軀が癒えても、それを許されなかった。ヌワンギとしては自分がまだまだ未熟なためにそう言われているのだと思っていたので、深く気にしたことはなかったが、トウケイはさまざまな情報を得るために一人で行動していたのである。

それらがヌワンギに無関係であるとは言えなかったが、得た情報のほとんどはヌワンギには隠されていた。

故に。

シケリベチムの侵攻も、苛烈な策略でそれを撃退したことも。

そして、ニウエ<sup>オウルネ</sup>皇が狩りの対象に選んだハクオロを強くするために謀ったことが、どのような事態を呼ぶに至るのかなど知る由もなく、軀が癒えた後のヌワンギには、ただひたすら修業の日々しかなかった。

ササンテがそうであったように、ヌワンギも決して弱くはない。ただ、本来自分のものではない強さを、自分の強さと思いこみ、それに頼る戦い方しかしていなかったヌワンギにとっては、トウケイによる修業はただ敵しいだけであった。

だが、その敵しささえも、これまでの自分が得られなかったものであることを心底から

理解し、トウケイの容赦ない鍛錬にも耐えていた。

「ケツケツケ、どうだい、ジイさん」

「なあに、まだまだ甘いわい」

「うっ…」

「最初よりは幾分まともになってはいるが、な」

「幾分まとも、だけかよ…」

「ほれ、口を動かすだけの余力があるなら、かかって参れ」

「おう！」

本来トウケイは二刀流の使い手であったが、それをヌワンギに教えることはしなかった。今さら教えたところで使い物になるまでに時間がかかりすぎるのは分かっていたし、ヌワンギがこれまで身につけた技を生かし、より実践的な戦い方を教えることを選んだのだ。

結果として、ヌワンギもそれを抵抗なく受け入れる形になったので、短期間のうちに腕を上げていくことになった。教えを受ける方と授ける双方の思惑が一致したのだから、それも当然の帰結と言えよう。

そんなある日のこと。

それまで何度となくしていたように、トウケイは情報を得るために一人で外出していた。ヌワンギにはもちろん一切伏せたままだったが、トウケイが帰ったときに、心なしか普段よりも険しい表情をしていたことに気がついた。ただ、それがどうしてなのかを、ヌワンギは訊けなかった。

その日の夜。

おもむろにトウケイが二本の刀を出して、念入りにその手入れを始めた。

「どうかしたのか？」

昼間の一件もあって、怪訝そうにヌワンギが尋ねると、トウケイは白刃から目を動かさずに、静かに答えた。

「ヌギよ。あるいは、頃合いかも知れぬ」

「頃合いって…」

にわかに真意が汲めずにそのまま訊き返したヌワンギだったが、昼間に見せたトウケイの険しい表情と、今の行動とを照らし合わせてれば、おのずと答えは見つかった。

「…戦でもあるのか？」

わずかに押し殺すような声色で尋ねると、トウケイはただゆっくりと頷いてみせるだけだった。

「不穏な噂を耳にしてな」

「それは？」

「クツチャ・ケツチャがトウスクルへの侵攻準備をしている、とな」

「何だよ？」

「噂によると、トウスクルの皇<sup>オウルオ</sup>は己の欲のために妻子を殺し、一族を裏切った者だと言われて、オリカカン<sup>オウルオ</sup>皇からは怨敵とされているらしいの」

そこにどんな経緯があるのかはともかく。トウケイの語り口からは、クツチャ・ケツチャの侵攻が間近に迫っていることだけは、はっきりと伝わった。

が、それに対してヌワンギはさしたる動揺はなかった。もとより、一事あれば身を投じ

る覚悟でこれまで修業をしてきたのだから、その成果を発揮する場が与えられるのであれば、迷わずに行くだけなのだ。

「オレにはあいつがどうだろうが、関係ねえさ。でもな、エルルウやバアちゃんが認めた奴が、そんな男であるはずないんだ。だから……」

「だから？」

「オレはオレに出来ることをやりに……行くぜ」

覚悟も意志もすでに固まっている以上、ヌワンギには翻意も躊躇もなかった。もちろんトウケイにそれが伝わらない道理がなく、ヌワンギの言葉に穏やかな笑みで答えるのだ。そもそも、ヌワンギがそう言うのを分かっていたからこそ、刀を出し、わざわざ状態を見るような真似をしたのだから。

「それでは、明日にでも行くとするかの」

「ジイさん？」

「久しぶりに皇都まで足を延ばすのも悪くないしな」

「ケツ、勝手にしな」

トウケイの真意など容易に察してなお悪態をつくヌワンギに、それでもトウケイは笑うばかりだった。

翌日。

二人は簡単な身支度をすませて、一路皇都を目指していた。

トウケイの腰には大きな刀が、ヌワンギの腰にはそれよりはやや小振りの刀が提げられている。いずれも片刃で、エヴェンクルガ族がよく用いるものである。

どちらもトウケイが大事にしていた刀であり、昨晚のうちにヌワンギに一本渡されたものである。当初ヌワンギは受け取るのを拒んだが、「武器が良ければ強いと言う物ではないが、手斧や山刀よりはこれの方がいいじゃろ」との言葉に押される形で受け取ったのだった。

理由はどうあれ、エヴェンクルガの武人ものびから大切にしている刀を渡されることは、武人ものびにとつて誉れと言えるだろう。受け取るのを拒んでいたヌワンギにとつても、それはやはり嬉しいことには違いなく、その足取りをも軽くさせるほどであった。

だが、ヤマユラの集落の近くまで来たときに、軽い足取りが止まった。

「…何だよ、今のは」

少し離れたところから、何やら激しい物音が聞こえてきたのである。

「戦の音じゃな」

険しい表情を見せて、トウケイが冷静にそれを分析すると、ヌワンギの心に焦りと不安が生じた。自分とはもなく、武人ものびであるトウケイが険しい表情を見せたのだから、それは切迫した状況であるかも知れないのだ、と。

「何処だよ、そりゃ」

訊きながら、ヌワンギはとてつもなく嫌な予感に気づいていた。集落のそばまで来て、戦の音がすると言うのが、どのような事実を踏まえているかを思えば、予感と言うよりも確信に近いものであったが。

「むっ、近いぞ、ヌギよ。急ぐとしよう」

そんなヌワンギの確信を裏付けるように、トウケイは素早く告げると、戦の音のする方

向へと駆けだした。

ヌワンギも続いて駆けだし、しばらく走った後、先ほどから戦の音を立てている場所の様子を見ることが出来た。

どうやら、ヤマユラの集落の周りに騎兵衆ラクシヤライを中心とした軍勢がいて、集落を囲むように陣を布いているらしい。

「な、何だよ、これ：ヤマユラの集落が囲まれてる、のか？」

「あれはクツチャ・ケツチャの騎兵衆ラクシヤライか。噂にただならぬ空気を感じていたのだが、まさかこれほど早く動くとはの：」

冷静に事態を見つめるトウケイに向かって、ヌワンギは声を上げた。

「ジイさんっ、こんなところでんびり見てるヒマはねえよ、行かなきゃ！」

「待てい、ヌギよ。儂らが行ったところで多勢に無勢、勝ち目はない」

「でもよっ！ オレにとっちゃ、あそこは：あそこはバアちゃんが」

「お前さんが行っても、死ぬだけじゃぞ？」

すっかり熱くなったヌワンギに、静かに告げるトウケイの言葉は、言った内容の重さを知らしめるには十分だった。しかし、それでもヌワンギは引こうとはしない。

「オレはただ……オレの大事なもんを守りたいだけなんだよっ」

自暴自棄で言ってるのではない。

ただ死を求めているのではない。

結果として、そこに確実な死が待っているようにも、それでも行かなければならない。今のヌワンギにはただそれだけしかなかった。



「愚かよの、お前は」

トウケイが小さく笑う。

「何とでも言ってくれっ！ とにかくオレは行く、死に行くんじゃないくて、オレ自身のためにつ」

決して呆れた末の笑いではなかったが、それ以上の言葉を待たずにヌワンギはトウケイに向けて言い放つと、戦場となつている自分の故郷へと走り去つていった。

遠のく背中を見つめた後、トウケイはふと空を見上げるようにしながら、つぶやいた。

「やれやれ、止めるのも聞かずに行つたか……。のう、トウスクルよ、決して無駄死にはしないとのお前との約束じゃが、もう構わんであろう？ ヌワンギだけを死に場にやるわけには行かぬからの」

そして、自分の腰の大刀に手を添え、一度敵しい目つきで戦場を見据えた後、ヌワンギの背中を追うように騎兵衆ラカシヤライのいる戦場へと向かった。

突然平和な集落のそばに現れた騎兵衆ラクシヤライを中心とした軍団。

どこの軍勢かなどを考える間もなく、ヤマユラの集落にいた者たちは、戦いへとその身を投じることを躊躇わなかった。もちろん、それが無謀なことなのは皆分かっていたが、何もせずに自分たちの集落を捨てることも出来なかったのだ。

「ここは俺たちの村だ。俺たちの大事な畑があって、大事な家があるんだ。アンちゃんたちがいつでも帰ってこれるように守らなきゃなんねえんだ。いいか、みんな、持ちこたえさえすれば、アンちゃんたちが来るんだからよお！」

周りを叱咤するテオロの声が響くと、それに周りから応じるように威勢のいい声が上が

る。

「おおーっ！」

「オヤジい、おめえも口ばつかじゃなくて、手え動かせよーっ」

決して樂觀出来る状態でないのに、皆の顔には悲壮さなど微塵もなかった。その理由は皆それぞれに違いはあったかも知れないが、一つにまとまっているのはハクオロと言う仮面の男の影を思い浮かべていたからだだった。

何より、ハクオロとともにインカラを倒したと言う思いが、良くも悪くも彼らの諦めの悪さを決定づけていた。さらには、インカラやササンテと戦っていたときに、少なからず集落にも防備を固めようと言う動きがあり、それらが不幸にも機能してしまっていることも、彼らの戦闘意欲を高めていた。

故に、彼らは最初に騎兵衆ラクシヤライが攻め寄せてきたときに、持ちこたえてしまった。そう、持ちこたえてしまったのだ。クツチャ・ケツチャの騎兵衆ラクシヤライにしてみれば、このような境界の

集落など通り過ぎるだけでもよかったのだが、あの憎き裏切り者を 皇オウルオと仰ぐ連中が小賢しくも抵抗してきたものだから、それを看過することなど出来ようはずがない。

『裏切り者を仰ぐ愚かな民には、その死を以て自らの罪を贖わせよ。汝ら死兵となりて、怨敵を屠れ』——それが騎兵衆ラクシヤライに下った命令だった。

戦う術と数に勝る騎兵衆は、気魄においてもヤマユラの民を凌駕していた。そのため、戦局は極めて短い間に変化を遂げていった。

「どこの連中か知らねえけど、俺たちは絶対に負けねえぜ」

すでに退路などどこにもないほどに周りをすべて囲まれている状態の中、テオロはそれでも気を吐く。しかし、傍らにいたヤーが頼りなげな言葉でテオロの気概を吹き飛ばしてしまう。

「そうは言ってもこう囲まれてると、どうしようもないダニ」

その場にいたのは、テオロとソポク、それにウー・ヤー・ター三人組の、これまでの戦いでハクオロとともに戦や後方を支えてきた者たちである。いわば、ヤマユラの集落の本営とも言える面子だ。

「ハクオロさんがいれば……」

そんな言葉を思わず漏らしたのはターだったが、その場にいた者は皆同じ思いだった。相手がどこの軍勢かは知らないものの、ハクオロが指揮し、一緒に戦ってくれば、それだけでどんな敵が相手でも負けない気がする。

だが、ハクオロは今ここにはいない。それが何を意味するかは、すでに分かっていることだったが、だからこそテオロは自分に言い聞かせていたのだ。

(アンちゃんたちがいつでも帰ってこれる場所を、トウスクル婆ちゃんが大事にして、そして眠る場所を俺たちが守らねえでどうするってんだよ！　ハクオロのアンちゃんだって：眠ってるんだぜ)

テオロが静かに自分の意志を固めていると、ソポクが耳打ちするようにそつと告げた。

「お前さん……都の方に、ハクオロたちにこのことを知らせなくていいのかい？」

ソポクに言われるまでもなく、それはテオロも気にしていたことだった。

自分たちは守るべきもののために、退くことをやめた。それを悔やみはしない。ただ、皇都にいるハクオロたちがこのことを何も知らなかったら、皇都もここ同様の目に遭うかも知れないと思うと、それこそ身を焦がすような思いに駆られるのである。

「ああ、カアちゃん、誰かが知らせに行かなきゃいけねえのは分かってるけどよ」  
テオロの言葉が詰まる。

分かつてはいるが、それを成すにはどれだけの犠牲を払うかを思うとその先が言えないのだ。

しかし、そんなテオロに向かって、ソポクは笑みを浮かべながらも叱咤する。

「ほら、どうしたんだいっ、あんたの大口は、飯を食らうだけかい？」

「ソグ——」

「あたしやそんな口先だけの男を亭主にした覚えはないよ」

「け、けどよお」

不利な戦場のさなかにあるとも思えないような、いつものやり取り。それを見て笑みを浮かべながら、控えめにターがテオロとソポクの間に進み出た。

「ぼ、僕が行くよ……」

「だめだ！ お前みたいなのが出てつても、死ぬだけだぜ」

テオロが即答する。それは確かに真実だろう。ターがいくら決意を固めたところで、戦のただ中に身を投じて無事にすむとは、誰もが思っていないのだから。

「お前さんっ！」

そんな風に無理を承知で進み出たターの気持ちを察して、ソポクは一層きつい口調でテオロを叱咤すると同時に、思い切りテオロの背中を叩いた。

そして、バンツと低い音がやんだ後。

テオロはターに向かってニヤリと笑ってみせてから、ソポクを正面にして真面目な表情で告げた。

「分かっているさ、カアちゃん。俺が行くからよ」

「オヤジ！」

「無茶ダニ」

すかさずウーとヤーが反論するが、それにもテオロは真剣な表情で答えた。

「んなこたあ分かっている。でもよ、誰かが行かねえとなんねえだろ？」

日頃から明るく豪快なテオロがことさら真剣な表情で答えたのは、その決意の堅さを何よりも雄弁に語っており、それ以上の反論を許さない気魄が込められていた。

「そうだね。こうなったら、お前さんしかないだろうさ」

「無茶だよ……」

止めることは出来ないのを承知しつつ、ターが不安そうな表情で漏らすと、それを吹き

飛ばすようにテオロは笑ってみせた。

「なあに、都まで軽くくひとっ走りするだけじゃねえか。なあ？ カアちゃんよお」  
テオロに合わせるように、ソポクもまた笑顔でそれに答えた。

「ああ、そうだね。軽く行っといで」

「それで、そのままアンちゃんたちを連れて来て、あいつらを蹴散らした後でよお」

「分かってるよ。あんたの好きな酒菜を山ほど用意して待ってるからね」

「さすが、分かっているじゃねえか」

「当たり前だよ、あたしを誰だと思ってるんだい？」

「それでこそ、俺の自慢のカアちゃんだぜ。ダーツハハハハ！」

一際豪快に笑った後。

テオロは数頭のウウエフタルマを引き連れて、いつでも出られるように準備した。行くのはテオ

ロ一人だが、人の乗っていないウウエフタルマと一緒に放すことにより多少なりとも危険を回避する目論見があつてのことだ。

「とは言え、どこかでうまく機会を作らないと無理だね、こりゃ」

戦の様子を見ながら、ソポクが当面の問題を指摘すると、ウー・ヤー・ター三人組がそれぞれ得物を手にして、ソポクとテオロの前に進み出た。

「任せる」

「そうだな」

「僕らが包囲陣に穴を作るから、オヤジはその隙に……」

「何言ってるんだよ、お前らっ」

三人の意図するところは、ひたすら無謀の一語に尽きることであり、いくら何でもそれを認めることはテオロには出来なかった。もちろん、自分のやろうとしていることはすっかり柵に上げているので、説得力など何もなかったのだが。

ともすれば無意味な言い合いが続きそうな場面であったが、やや慌てた様子のソポクの声にそれは終わりを告げた。

「お前さん、ちよつと！」

「ん？ 何だよ」

「様子が変だよ、奴ら」

「変？」

「ほら、何だか知らないけど、あそこに隙がないかい？」

らしからぬソポクの態度にテオロも怪訝そうにしながらも、ソポクの指し示す方向を見ると、確かに騎兵衆（カウシキヤウ）の包囲網の一部に乱れが生じていた。

「確かに……でも、罨じゃねえか？」

「この期に及んでそんなこと気にしても始まらないよ」

呆れるような表情を見せるソポクがさらに言葉が続ける前に、テオロは慌て気味に発した。ソポクにここで「臆病者」呼ばわりされたくはなかったのだ。

「そ、そうか。確かにそう言えばそうだな。よっしゃ、それじゃこの機会を逃さずに行くとするぜっ！」

「ああ、行つといで」

「じゃあ、また後でな」

『エルルウの下に』

まるで野良仕事に行く夫を見送るようなソボクと、本当にちよっと出掛けるだけのよう  
なテオロだが、これがお互いに交わした最後の言葉になることなど、分かっていた。

テオロやソボクだけではなく、集落の誰もがすでに死と言うものの足音を聞き取ってい  
たのだ。

それでもなお、彼らは退くことをしなかった。



包囲網に生じた混乱に乗じて、テオロが出立する少し前のこと。

殲滅せしめるために集落に向けて二度目の突撃をしようとしていた騎兵衆ラクシヤライの後ろから、一人の漢おとこが刀を振りかざして乱入してきた。

「うらあああああああ」

又ワングである。

はつきり言ってしまうれば、無謀であった。策も何もなく、ただ突撃してきただけなのだから。

しかし、いきなりの単身による切り込みに騎兵衆ラクシヤライは少なからず混乱した。

「何だ、こいつはっ」

「うぬう、敵の新手かあっ」

誰の目にも無謀としかとれない行動であるが故に、逆に戦馴れしてる者は援軍の可能性を感じ、一時的に指揮の混乱を招いたのだ。

しかし、相手がどう思ったとしても、又ワングにはあまり関係のないことだった。何故なら、又ワングにしてみれば、ただひたすら敵を倒すだけしかなかったから。

「ケツケツケツ、何を慌ててやがるんだよっ！ この又ワング様が teme 一人残らず蹴散らしてやるぜえ！」

一際大きな声で叫んだ後、又ワングはトウケイより借りた刀を構えて、手当たり次第に騎兵衆ラクシヤライに斬りかかっていった。はったりと言うよりは、凄まじいまでの気魄と、言いようのない高揚感が又ワングを支配していた。

（そうさ、オレは一人で戦ってんじやねえ！）

自分に刀を、己の半身を預けてくれた漢わとこがいる。その漢わとこは戦う術を自分に教え、漢わとこには死ぬべきときがあることも教えてくれた。

「うらあつ、このオレ様の前に出んじやねえよっ！」

叫びながら、騎兵衆ラクシヤライの足ごとウマを斬る。あぶみに足だけを残して、騎兵衆ラクシヤライが振り落とされると、そいつが持っていた槍を奪い、心臓をひと突き。

後ろから迫ってくる者に対しても、ヌワンギは素早くかわすと、繰り出された槍を刀で一度はじき、すぐさま柄の部分を狙って刃を立てた。そうして体勢が大きく乱れても、その隙を狙って来た者に対して強引な体捌きで紙一重で槍をかわす。

ヌワンギがトウケイから学んだ戦い方には、流麗さや優雅さなどは微塵もないものだった。ただひたすらその場を凌ぐだけの、剣術や体術などとは到底言えるものではなかったが、それこそがヌワンギが自身の経験で培ってきた戦い方でもあった。

粗野で無駄の多い、荒削りな動き。剣法の達人から見れば、何と無駄の多いことかと嘆くであろうほどに。だが、そのどの流派にも属さない、戦の中で得た動きであるが故に、騎兵衆ラクシヤライをして苦戦せしめたのである。

ヌワンギの荒い動きに合わせるように、騎兵衆ラクシヤライの一人が槍ではなく、刀で斬りかかると、ヌワンギはそれを意に介した様子も見せずに、相手の刀ごと刀で薙払ってなお、そのままの勢いで兵士自身の軀をも切り裂いた。

「邪魔だっただよお！」

数人を屠ってなお、ヌワンギの勢いは衰えを見せず、手にしていた刀の切れ味にしても一点の曇りがない。

(これが…本当の漢おとこの持つ、本当の刀つてヤツか)

何よりもヌワンギ自身が切れ味の凄まじさに驚きながら、同時にそれほどのものを貸し与えてくれたトウケイの心遣いと、そこに含まれた真意を感じていた。

(ふさわしい死に場…か)

クツチャ・ケツチャの軍勢が何を狙ってヤマユラに攻め寄せたのかは分からない。分かったところで、ヌワンギにはどうでもいいことである。ただ、自分の故郷を、自分の大事な人が眠る場所を、そして愛しい娘と過ごした大事な場所を守りたいだけなのだ。

さればこそ。

こうなることが予想出来ていたからこそ、トウケイは昨晩になって刀を出し、うち一本を自分に渡してくれたのではないか。故に、自分はここで死んでも構わない、そんな思いがふとヌワンギの中に生まれ出た。

わずかな隙が生じた。いや、正しくは、隙などヌワンギにはいくらでもあった。ただ、気魄がそれを感じさせなかったただけだったのだが、死んでもいいと思った瞬間、ヌワンギの気魄は一瞬ではあるが、確かに失われた。

直後、焼け付くような痛みが軀を突き抜けた。

「ぐあっ」

槍がヌワンギの太股を突き抜け、切っ先は地面へと刺さり、ほぼ完全にヌワンギの足の動きを封じていた。

『己だけが満足するような愚かな死など、漢おとこの死に様ではない』

(って、そうだよな)

不覚をとったヌワングの頭に、トウケイの言葉が浮かぶ。同時に、少なくとも今ここで余計なことを考えてる余裕はないのだと、ヌワングは己を奮い立たせた。

「死ねっ！」

鬼のような形相で刀を抜いて振り下ろす兵士に、ヌワングは咄嗟に刀を持ち替えて、兵士の刀を受け止める。

「ケツ、これぐらいで、このヌワング様がやられるかよっ」

「くっ…しぶとい奴め」

忌々しげに言葉を漏らす兵士は、周りに目配せをすると、刀に力を込めてヌワングを押し込めようと試みる。だが、ヌワングも先ほどの気魄をまたもや纏い始め、容易に許さない。

「こんなところで、死ねるかよっ！」

そればかりか、動かない足にすら力を込めて、気合いととも、兵士の刀を打ち払ってみせた。

そして、相手の軀が無防備になった瞬間に一閃。エヴェンクルガの武人の刀は、甲冑ごと兵士を切り裂いた。

「うぬれ…。相手は一人で、しかも手負いであるぞ！」

騎兵衆ラヴレンツハイの中から声が上がると、

「へっ、足が動かねえオレ様を相手にしてくれえが、テメエらにはちょうどいいってもんだろうぜっ」

それでもなお負けずに言葉を吐いてみせるヌワングだが、その実、足に刺さった槍に

よって動きを封じられたのは致命的であった。これまで単身で戦い抜けたのは、身軽さがあってこそなのは、誰よりも自分がよく知っている。だが、それでもここで死ぬことを潔しとは出来なかった。

「この期に及んでまだ言うかあ」

騎兵衆ラクシヤライの一人が槍を振りかざしていた。だが、それはどうしても動けないヌワンギにとっては、まさに死の間合いであり、刀で受け止めるのが関の山であった。

（まだだ！ まだ、オレの役目は終わっちゃいねえはずだ！）

だが、その直後に軀をまっぶたつに裂かれたのは、ヌワンギではなく騎兵衆ラクシヤライの方だった。  
「なっ…」

驚きの声を上げながら、何が起こったのかをよく見ると、激しく血しぶきを上げる騎兵衆ラクシヤライの後ろに、大刀を振り下ろしたトウケイの姿があった。

「よくここまで耐えたのお。あれだけの期間でここまでやれば、上出来じゃよ」

トウケイはヌワンギに向かって一度だけ笑って大刀を構え直すと、息一つ乱さずに、寄せてくる敵を一刀の下に斬った。

「ジイさん、すげえな！」

ヌワンギがたまらずに声を上げると、周りにいた騎兵衆ラクシヤライもわずかに怯んだ様子を見せた。

「さて、それではお前さんの故郷へと参るか」

「多勢に無勢で、死ぬだけじゃなかったのかよ？」

「人とは思うようには行かぬものでな。致し方あるまい？ それにな、お前さんには言つてなかったかも知れぬが、義に死ぬは愚かなれど、信じるものに死ぬはそう愚かではな

ろうよ」

ヌワンギの足に刺さった槍を抜き、至って普通に会話しながら、なおも周囲を圧倒するほどの気を吐いているトウケイ。

(これが、エヴェンクルガの漢か……上げえぜ、本当によ)

自分のことを不義不忠の輩と語っていたトウケイであっても、エヴェンクルガの漢であることには、何の曇りもない。それをヌワンギは今直接肌で感じていた。そして、こんな自分と一緒に戦ってくれるエヴェンクルガの漢に、心服していた。

こんな漢とともに戦えるのなら、これで死んでも悔いなどない。そう思うほどに。

「もうひと暴れするかいの」

「おうよ！」

すべてを覚悟して、一切迷いのない声でヌワンギが答えると、トウケイもまた笑ってみせた。死地にあつて、至上の楽しみを見出したが如く。

『弓衆つ、構えー』

遠くで叫ぶ声がする。

だが、槍を抜いたとは言え、すでにヌワンギの動きは著しく精彩を欠いたものになっており、この場を離れて避けることは不可能なのは、ヌワンギにしても、トウケイにしても分かっていたことだった。

故に、彼らには弓が迫ることを知ったところで、どうでもいいことだった。迫り来る敵をただ斬り捨てるだけしかないのだから。

だが。

唐突に、二人が戦っている場に、乱入してくる者があつた。

後ろからではなくて、囲まれているはずのヤマユラの集落の方向から。

それは、暴走する数頭のウマウマの集団だつたが、その一番後ろにいたウマウマだけは人が乗っていた。

「おっ…」

ウマウマの背に乗っていた者、テオロが短く声を上げた。少し前に、この混乱に乗じて集落から単身抜け出たのだ。

『放てーっ』

ほんの一瞬の交錯。

驚きの表情を隠せないテオロとヌワンギ、それに、遠くの号令に反応するトウケイ。

彼らに向かつて、矢の雨が、容赦なく降り注いだ。

「行けよっ！」

反射的にヌワンギはテオロに向かつて叫び、テオロの乗るウマウマに矢が当たたらぬように、文字通り矢面にその身を晒していた。

トウケイは大刀を大きく振り回しながら、降り注ぐ矢を払い落とそうとしていた。無論、ヌワンギとテオロの前に出て。

「お前は…ッ」

テオロもまた矢を避けながら、何かを言いかけたが、途中でその言葉は止まった。

テオロもまた漢おとこである故に、自分が出る機会を作ってくれたのが、ヌワンギともう一人の漢おとこであることを瞬時に悟り、ヌワンギも自分が切り込んで戦ったことが無駄ではな

かったことを悟ったのだ。

二人の漢の視線が交錯した後。

テオロは一度だけニヤリと笑うと、一際強いむちを当てて、その場から走り去って行った。幸か不幸か、弓の攻撃のために騎兵衆がやや距離を置いていたので、テオロはそれ以上の追撃を受けずに皇都に向かうことが出来た。ただし、この時点で背中に矢を受けていたため、ハクオロに急を告げた後に穏やかに旅立っていった。愛しい妻や仲間たちが待つ常世へ。

テオロが去った後。

その場に残ったトウケイとヌワンギにも、限界が訪れようとしていた。

いくらトウケイが優れた武人であっても、迫りくる矢の雨をすべて雑払うことは不可能であったし、そもそもヌワンギはすでに足が満足に動かぬ状態でお、出血もおびただしい量になっていたのだから、二人にそれほどの時間は残っていないのは、明らかだった。

それでも、ヌワンギは満足だった。

すでに満身創痍で、まともに戦え得る状態ではなかったのに、楽しくてしょうがないのだ。

(これまで：色んなことやってきたけど、こんなに楽しいことはねえぜ)

つまらないこと、どうしようもないことばかりが続いた人生だった割に、最期にこうして自分の信念のままに行動し、それが少なくとも誰かのためになっている。それだけのことなのに、たったそれだけのことなのに、言いようもないほどに楽しくてしょうがないの



だ。

「なあ、ジイさん」

「何じゃい」

乱戦状態の中で、すでに足の動きが止まったヌワンギが声を掛けると、トウケイも傷ついた軀をヌワンギに寄せて答えた。

「楽しかったぜ、ほんとに」

「そうか。俺もお前と会ってこんな楽しいことを一緒に出来て嬉しい限りじゃ」

「けどよお、楽しすぎて、力が入らねえんだよ……」

「ならば、最期は笑って逝くがいいぞ。この俺が見届けてやる」

「そうだな、笑って逝くってのはいいよな。それに、ジイさんが見届けてくれるってんなら、寂しくなくていいぜ」

「はははははは、愉快愉快」

互いに笑い声を上げる二人に、騎兵衆ラクシヤライの槍は容赦なく迫っていく。

トウケイはそれでもなお寄ってくる騎兵衆ラクシヤライの槍をかわし、大刀を返礼にしていたが、すでに足の動きが止まっているヌワンギには、それらをかわすことなど不可能だった。

ぶすり、ぶすり、鈍い音が続ぎ、ヌワンギの軀に余計な穴をあけていく。

（へっ……本当に痛くねえや……）

だが、痛みは感じていなかった。

楽しくてしょうがないのだから。

（漢おとしとして……このオレが、こんなすげえ漢おとしと一緒に……やれたんだぜ？　こんなすげえ

こと、あるかってんだ……なあ……)

やがて、ヌワンギの動きが止まる。

「ジイさん……借り物、返すぜ……」

(エルルウ……)

トウケイに向かつてつぶやくように告げた後、ヌワンギは心の中でそっと愛しい者の名を呼んだ。瞳はすでに何も映さなくなっていたが、ヌワンギは確かにエルルウの笑顔を見ていた。

そして、ゆっくりと、トウケイの方に倒れ込んでいった。

「……ヌワンギよ。よく頑張ったな、ゆっくりと休むがいい……」

トウケイはヌワンギの臉をそっと塞ぎ、その手から刀を取りながら、つぶやくように言葉が続けた。

「我が孫トウカよ……お前はこのような愚かな生き様など、するでないぞ」

そして、自分の手に二本の刀を持ち、自分本来の構えを見せると、今なお敵意を放っている騎兵衆ラシヤライへ向かって叫んだ。

「クツチャ・ケツチャの兵たちよ。さあ、この不忠不義なるトウケイを討つがいい。ただ、儂とてエヴェンクルガの武人ものぶ。ただで死ぬるは潔しとせぬ故、覚悟せられよ」

叫んだ後、トウケイはその軍勢の中へと身を投じていった。

『エルルウの下に』

時がたち、かつて戦場だった場所にも、平安が訪れる。  
草木が茂り、小鳥が舞い、何も知らぬ子どもが戯れる。

そして。

誰一人として気づかぬ場所に、ひっそりと咲く花があった。

そこに一人の漢おとこが眠っていることなど、誰も知らない。

ただ“エルルウ”の花だけが、時折吹く風に揺れているだけ。

花と同じ名を持つ娘への想いのままに、笑いながら逝った漢おとこを優しく見守るように。

(了)

あとがき

・物語について

とにかく「ヌワンギの漢（おとこ）としての死に様を書いてみたい」。それがこの話のすべてです。失意のうちに死にゆくのではなく、漢として己の信念に従って行動し、笑って死ぬる、そんな死に様を。

いちおうここで語ってるのは改心した後のヌワンギなので、本編のキャラと微妙に違っています。「そう言うものだ」と思って下さい。そんなにはずしたつもりはないし、改心してもヌワンギはヌワンギだと言う部分もありますし。

・トウケイについて

オリキャラ嫌いと言う方には申し訳ないですが、ヌワンギだけではどうしても弱すぎるので、登場していただいた剣士です。

義に生き、義に死ぬのは確かにかっこいいのかも知れませんが、それだけではない部分も絶対にあるはずだと思って、このような人物像にしてみました。名前の由来は、息子がウンケイ、孫がトウカ、と言う具合に少しずつ名を継いでいくと言う形もありだなと思っただけです。エヴェンクルガの名前は漢字っぽい（冬慶、運慶、冬花とか）ですし。

トウカがクツチャ・ケツチャに味方していることなど、トウケイは知りません。トウカも自分の祖父がそこで戦ったことなど知る由もありません。それが、武人たるエヴェンクルガの厳しさであり、皮肉な一面であるのだと言うことです……って、作りすぎですかね？

なお、トウケイは本来は二刀流の人と言う設定です。最後にその姿になってますが、そこで死んだか生き延びたかどうかはあえて伏せておきます。ついでに言うと、トウケイはオボロの二刀流の師であったかも？

・ヤマユラの集落のこと

集落の方で実際にどんな経緯があったのかは本編では語られませんが、親っさんの死に様は本当に悲しかったです。叛乱が収まり、新しい國として歩みだした矢先だっただけに、「まさかそんなことになるなんて…」とハクオロ同様にくやしきを感じました。だからこそ、書いてみたい場面でした。死を前にしたときの彼らの様子を。豪気なソポク姉さんの笑う様を……いえ、ただそれだけです。

二〇〇二年五月二十三日 記

・改訂にあたって

原作では、ケナシコウルベ陥落からヤマユラ集落全滅まで、オンカミヤムカイからの来訪、シケリベチムの侵攻・撃退と言う流れを踏まえているのですが、当初この話を書いたときにはそれらを一切考慮していません。時間経過を極めて短いものとして書いていました。

今回の改訂はその原作との矛盾を正すべく進められたのですが、このような基本的な設定のミスに後になって気づくのも、我ながら間抜けとしか言いようがありません。結果として、ヌワンギの見せ場が増えた（軀も完全に癒えて、トウケイに戦い方を教わることが出来るだけの時間があり、戦闘場面が増えた）ので、よしとしてください。

二〇〇二年五月二十九日 記

『エルルウの下に』

2002/05/23 初版

2002/05/29 改訂

2016/05/04 pdf書式変更

a s h

a s h

a s h